

気付きの質を高める

～生活科教育の新地平を拓く～

上越教育大学大学院学校教育研究科 木村吉彦

はじめに

昨年3月、新しい学習指導要領が告示されました。平成元年の指導要領に生活科が新設されてちょうど20年。生活科もようやく成人を迎えました。そして今回の改訂がこれからの生活科の10年を決めることとなります。今回の改訂では、教科目標はそのままですが、学年目標が1つ増え、「自分のよさや可能性に気付く」ことが改めてクローズアップされました。また、内容には「生活や出来事の交流」が加えられ、9内容になりました。そして内容及び内容の取り扱いについて改善された事柄として5つ挙げられていますが、その第一番目が「気付きの明確化と気付きの質を高める学習活動」です。今回の生活科の学習指導要領改訂の最大のテーマは「気付きの質を高めること」である、と考えていいと思います。

平成10年の改訂のとき「知的な気付きを大切にすること」が取り上げられました。また、今回の改訂に当たって、理科教育との接続とも深く関わる「科学的な見方・考え方の育成」が挙げられました。一方、全国研究指定校報告分析(2005)では、生活科の気付きには「対象への気付き」と「自分自身への気付き」の2種類があることが指摘されています。「活動あって学びなし」の批判に応えようとした「知的な気付き」、実践の中から明らかにされた2種類の気付き、これからの生活科の方向を決めるであろう「気付きの質」、これまでもこれからも「気付き」は生活科にとって教科の本質にかかわる問題です。

1 気付きとは

今回の改訂により、生活科における全ての内容において、具体的な学習活動や学習対象を示すとともに、学習対象とかかわったり学習活動を行ったりして、関心をもつこと、気付くこと、分かること、考えることなどの大切さが明確にされました。

ここでは、まず「気付き」の定義から確認します。

気付きとは、対象に対する一人一人の認識であること、児童の主体的な活動によって生まれるものであること、そこには知的な側面だけでなく情緒的な側面が含まれること、気付きは次の活動を誘発するものであること(『解説』4頁) というように明確な定義がなされました。

この中で特に大切なのは、「一人一人の認識である」という定義です。これは、子どもそれぞれの「主観」を大切にしましょう、ということです。生活科は、かつての低学年理科や社会科と違い、子ども一人一人の思いや願いを大切にします。そのとき、主観に基づく子ども独自の気付き(主観知)を認めてあげて下さい。実は、それがやがて客観知(科学的な認識)に結びついていくのです。

さらには、学年の目標において、目標1では「地域のよさに気付き」、目標2では「自然のすばらしさに気付き」、目標3では「自分のよさや可能性に気付き」という言葉が加えられ、学習

活動において、一人一人の子どもにどのような認識が育つことが期待されているかが明確に示されました。これらの認識の源が、すべて主観に基づく気付きにあるのです。

2 対象への気付きと自分自身への気付き

「はじめに」でも述べましたが、気付きには2つの種類があると考えますと、子どもの気付きの見取りがしやすくなります。

対象への気付き

自分とのかかわりで働きかけ、働き返された「ひと・もの・こと」についての気付き（他教科の「知識・理解」に類似）のことです。主観的な知のレベルから客観的な知のレベルにまで高まることが期待されます。このとき、見つける・比べる・たとえるなどは、対象への気付きの質を高める上で重要な「考える力」です。

自分自身への気付き

自分のやったこと（活動内容）や今の自分の気持ちの自覚から始まり、「わかるようになった自分」「できるようになった自分」つまり「成長した自分」への気付きにまで至らせたいものです。各単元・小単元の振り返りで気付かせることができるはずです。例えば、「小屋掃除を上手にできるようになった自分の自覚」は、児童に自己肯定感を持たせ、生きる自信を持たせることにつながります。この生きる自信が「自立への基礎」を養います。

3 気付きの質が高まるとは～実践例から～

「ぐんぐん！すくすく！わたしのおやさいさん」における気付きの実際（実践者：上越市立高志小学校 平成19年度2年生担任 水澤恵理子教諭）

対象への気付き

2年生になると、先生が用意しなくても、本を自分で購入したり、図書館から借り出したりして教室に置いておく子どもが現れました。そして、本を持って畑に出かけ、野菜のすぐそばで調べる行動をとる子どもが現れました（写真）。日常的な栽培活動（繰り返し畑に通い、毎日野菜と対面する活動）が子ども達に強い愛着とこだわりを生み、自主的に本を手にする行動につながったと思われます。本を自分で手に入れるという行動は、情緒的な側面としての気付きが高まり、愛着・こだわりさらには意欲を生み、それが行動に結びついたと思われます。この意欲は、対象への気付きの知的側面の前提になります。



一方、栽培技術や収穫の方法という知的側面での対象への気付きも高まっています。

気付きの知的側面での高まりは、主観的な知のレベルから、より客観的なレベルの知にまで高まることを意味しています。例えば、A児はキュウリを収穫するに当たって、先生のいつもの指導をもとに「キュウリさんにとっていい？って聞いたら、いいよって言ってくれたよ」とまだ10cmにも満たない実を収穫しました。その結果、「とげとげがあって味も苦くておいしくなかった」と感想を述べています。まさしく、主観的に（自己中心的に）収穫してしまったのです。それに対してB児は、「おじいちゃんからキュウリは長さ20cm・重さ100gが収穫の目安と

聞きました。本にもそう書いてありました。」という情報をお野菜さんスピーチで紹介しました。するとA児のみならず、クラスみんなが定規を持ち出して20cmを測り、収穫し始めました(写真)。水澤先生は30cm物差しを算数学習に先駆けて全員に配ったそうです。このように、より客観的な尺度による収穫の目安を自分たちの力で情報収集し、かつ行動に移すことができたのです。2年生達の、本で調べて客観的情報をもとに正しい収穫時期を特定するという活動はまさしく、情緒的・知的両面での対象への気付きの質の高まりを示していると言えます。

自分自身への気付き

自分自身への気付きはどうでしょうか。水澤先生は、「夏やさいさんがくれたもの(できれば理由も)」という課題で作文を書かせました。2人の作文シートを紹介します。



夏やさいさんがくれたものはみです。
二つ目はきもちです(なぜなら、わたしはいじっぱりでやさしいきもちはほんのすこししかないから、やさしいきもちをくれたとおもいます)。三つ目はゆうきです(なぜなら、ほんとうはわたしははずかしがりやだからゆうきをくれたとおもいます)。

夏やさいさんがくれたのはミニトマトです。二つ目はいのちです。三つ目は力です。四つ目はこころです。やさしいこころです。

全ての子どもが理由まで付けて作文を書けたわけではないそうですが、心情面での自分の成長について気付いていること、また言葉で表現できていることに驚きます。個人差はあるものの、もう一人の自分による自分の観察力の育ちには目を見張ります。2年生の特徴としての抽象的な思考力の高まりは、対象への気付きのみならず自分自身への気付きにも明確に現れていることが読み取れます。年間計画に立ち返れば、日々の継続的活動(繰り返し)と頻繁な振り返り、そして視野を広げる情報や調べ方の情報の提供、それらが抽象的な思考力の発達と相まって、2年生の子どもならではの気付きの高まりをもたらしたと考えられます。

4 気付きをもとに考える力を高めるために

充実した体験を繰り返すことと教師の適切な働きかけにより、子どもは様々なことを発見し、発見した喜びから別のもものと比べたり、たとえたりする活動と表現をするようになります。これらはすべて充実した活動や体験の結果であり、気付きの質を高め、思考力を高めることに結びつきます。気付きのもつ情意的な側面は、愛着やこだわり、さらには意欲に結びつき、知的な側面は、主観的な気付きからより客観性の伴った気付きへと高まっていきます。

今回の学習指導要領において取り上げられた、見付ける、比べる、たとえるなどの多様な学習活動とは、児童の気付きを質的に高め、思考力を高めるための具体的な手だてのことを意味し

ています。

「ハムスターはえさを食べるとほっぺが風船みたいにふくらむよ」

「僕の風で動くおもちゃは、友達のよりずっと速く走るよ」

これらの子どもの言葉には、見付ける、比べる、たとえるが含まれています。これらの言葉を子どもが自ら発するようになるために、教師は学習環境の設定を工夫しなければなりません。私は4つの学習環境設定を心がけて欲しいと考えています。

第1に、対象とじっくりかかわれる時間を確保することです。飼育や栽培はもちろんのこと、おもちゃ作りなどでも、まず子ども自身が納得行くまでおもちゃ作りに没頭することが大切です。

第2に、多様な対象とかかわれるようにすることです。例えば、野菜作りでは、子どもが自分の植えたい野菜を決められるようにすることで、畑には様々な野菜が育つことになります。たくさんさんの野菜を目の前にした子どもは、自分と同じ種類の野菜の育ちの違いを見付けたり、違う野菜を見ては自分の野菜との育て方の違いを確かめたりすることができます。また、地域探検の際に、近所の農家の野菜畑を見ることで、自分たちの育て方と違うことに気付くこともあるでしょう。

第3には、交流の機会を持つことです。自分のおもちゃと他児のおもちゃを一緒に走らせてみることで、どうして速さに違いが出るのかを考えるきっかけが与えられます。

そして第4には、気付いたことを表現する機会を多く設けることです。対象に繰り返しかかわることで、子どもは様々なことに気付き、気付いたことを表現したくなります。教師は、毎日の活動の中で、児童の気付きを話し言葉や書き言葉、絵等で表現する機会を様々な設けることが大切です。見付ける、比べる、たとえるを取り立てて指導するのではなく、日々多様な対象とかかわることを大切に、交流や表現の機会を多くもつことが、観察力や思考力、そして豊かな表現力を育てることにつながるのです。

おわりに

英語で「教育」と訳される「education」動詞にすると「educate」の元々の意味は、「引き出しを開ける」です。外から見て何が入っているか分からないものを引き出して中身を明らかにする、ということです。教育学の見地からしますと、「潜在的な能力を引き出して顕在化する」「子どものもつ可能性を外に引き出してあげる」ということになります。生活科で最も大切なことは、気付きを初めとして、子どもの思いや願い、興味・関心、好奇心、探究心、意欲、自己表現力等々、これら全てを「引き出してあげる」教師の姿勢であると思います。生活科では、あらかじめ決まった答えや唯一の正しい答えがあるわけではなく、子どもそれぞれの中から引き出され、生み出された答えがすべて なのです。ですから、生活科で子どもを育てようとするとき、教師の心構えとしては、「教える」ではなく「引き出す」なのです。ここで皆様に提案します。

Teacherもいいけど、Educatorをめざそうよ！

引用・参考文献： 木村吉彦『気付きの質を高める生活科12ヶ月』（学校図書、2008）